

〔学術論文〕

カントの人間学 Kantische Anthropologie

森 哲彦
von Tetsuhiko Mori

「カントは、彼の作品によって、世界史的意義を持つ一歩を、哲学することにおいて押し進めた。恐らくプラトン以来、思考の苛烈な空気の中で、またそこからして働きかけることによって、技術や自然支配の領域ではなく、その思考法、その自己意識、その諸理念、その衝迫、その善意志のために人間の内面において、これほど遠くにまで及ぶ影響を与えた出来事は絶えて起こらなかっただろう」 (K. Jaspers : Der Monat. 1954. Febr.)

要旨に代えて カントの哲学フレーズに「人は哲学を学ぶことはできない... ただ哲学することを学びうるのみである」(B866) とある。カントのいうこの「哲学を学ぶ」とは、知の認識偏重に対する諫めのことで「哲学すること」とは、哲学を通しての思考を求めていることである。カントも前批判期で苦闘して道を開いたように「哲学すること」は、哲学と哲学史の相互関係問題でもある。つまり「哲学すること」にとっては、誰かの根源的なものを問う哲学や人間社会の現実を思考する思想を手掛かりとして、歴史的に対話することが問題となる。従って「哲学の過去に立ち戻ることは、常に同時に哲学的自己省察と自己反省という行為でなければならない」¹⁾ といえよう。

さて十八世紀後半のカントが課題とする理性、人間、人格、平和、啓蒙、多元主義をめぐる諸問題は、今日の課題とある種の類似関係がある、と思われる。そうだとするとこのような問題意識を自覚するために、本論では、カント批判哲学の理性哲学、実践哲学、美学、宗教哲学、そして人間学を解明するものである。なおカントは、今日に至るまでドイツや日本のみならず世界的にも、多くの市民により、高く評価されてきている。では人々を引き付けて止まないカントの偉大な精神とはなにか。

まず第一は、批判の精神といえよう。カントの批判精神は、恣意的、独断的見解や懐疑的見解を退け、厳密な思考により、対象を全体的な関連から明晰に解明する。つまり批判とは「書物や体系の批判のことではなく、理性がすべての経験に依存せず切望するすべての認識に関してのことであり、従って形而上学一般の可能性もしくは不可能性の決定、この学の源泉、範囲、限界を規定」(AXII) することにより、普遍的なものを求める精神である。第二は、人格尊重の精神である。カントによれば、理性的存在者としての人格は、相対的価値しかもたないものから区別され、目的自体として絶対的価値をもつとする。つまりカントは、人間尊厳の根拠のために、普遍的な道徳的法則を立て、理性自ら立法する自律的、理性的人格を確立する。その理性的人格は、

良心の声、絶対的な道徳の声、道徳的義務の声を要請する。そしてこの道徳的義務の使命を発するところの人間を尊ぶカントの人格主義が、カントの名を不朽のものにしているのである。

キーワード：理性 (Vernunft)、道徳性 (Moralität)、目的 (Zweck)、神 (Gott)、人間 (Mensch)

I 序

カント批判哲学構想において、人間学が一つの位置を占めていることは周知のことからである。ではカントの人間学、とりわけ超越論的人間学は何を意味し、何を志向するか。その際この問題に対し、カントの人間学のみを対象にしては解明は不十分であり、また理論哲学や実践哲学の分析にとどまっていたは人間学の解明に至らないと思われる。そこで個々の批判哲学をそれぞれ分析的に考察し、それらを相互関連づけ、総合的に思考する視角から、本論では、カント人間学、超越論的人間学の解明を課題とする。考察の前提としてまずカントの先行者、さらに哲学者カントの年譜を見ておこう。

II 近代哲学とカント

17世紀初頭、イギリスのベーコン (F. Bacon) やフランスのデカルト (R. Descartes) が活躍していた頃、ドイツでは、30年戦争 (1618-48年) が勃発し、ドイツにおける大半の大学は閉鎖され、政治的、経済的にも後進国となってしまっていた。その影響を受けて、その後のドイツに出現した近世哲学者ライプニッツ (G. W. von Leibniz)²⁾ は、ドイツではなく、先進国フランス、パリに学ぶ。そしてそのライプニッツ哲学をドイツで論証化し、体系化した講壇哲学者が、ヴォルフ (C. Wolff)³⁾ である。そしてこのライプニッツ=ヴォルフ学派が、1740年頃から一時ドイツ哲学思想界を風靡していた。その頃、文化的後進国であったドイツ・プロイセンに対し、先進国イギリスからフランスに広がった啓蒙哲学 (Aufklärungsphilosophie) は、東プロイセン・ケーニヒスベルクの哲学者カントによって近代哲学として完成されるに至る。カントによれば、一方で近世フランス哲学に見られるように、神の存在を根拠なしに断定する「独断論 (Dogmatismus)」に陥る合理論、合理主義と、他方でイギリス哲学に見られるように、認識の可能性を疑う「懐疑論 (Skeptismus)」に走る経験論 (Empirismus)、経験主義とを批判、調停し、理性の自律と人間の自由を確保しようとするのである。

さてカント以前の近世哲学者達は、もともと上流階級に属し、大学教授を職業としていない。例えば、貴族で金持ちのデカルト、年金を受けとるホブズ (T. Hobbes) やスピノザ (B. de Spinoza) は、大学教授ではない。これに対し近代のカント (I. Kant) は、大学教授となり、いわば職業哲学者である。以上のことを念頭において、カントの年譜と彼の代表的な論文・著作の

刊行を年代順に見ておこう。括弧内のローマ数字は、アカデミー版カント全集の巻数である。

カント年譜と著作

- 1724年 4月22日、革紐職人の息子として東プロイセンの首都ケーニヒスベルクに出生〔1729年ヴォルフ『第一哲学、存在論』出版〕
- 1733年 敬虔主義（ルター派）のフリードリッヒ学院に入学し、古代作家とラテン語に心酔
- 1737年 12月、母死す〔1738年ヴォルフ『一般実践哲学』、1739年バウムガルテン『形而上学』、1739-40年ヒューム『人間本性論』〕
- 1740年 ケーニヒスベルク大学に入学し、哲学、数学、自然科学を研究〔1740年フリードリッヒ大王即位-86年、1740年バウムガルデン『倫理学』、ヴォルフ『自然法』、1744年クヌーツェン『彗星についての理性的思想』、クルージュス『理性的生活の導き』〕

〔前批判期〕

- 1746年 3月、父死す『活力の真の測定に関する考察』（I）卒業論文
- 1747年 家庭教師生活開始〔1748年ヒューム『人間知性の哲学的試論』、1750年バウムガルテン『美学』、1754年ライマルス『自然宗教の最も重要な真理』〕
- 1755年 ケーニヒスベルク大学私講師、論理学、数学、物理学、形而上学、自然地理学を講義『天界の一般自然史と理論』（I）、『形而上学的認識の第一原理の新解明』（I）就職論文〔1755年ルソー『人間不平等起源論』、リスボンの大地震〕
- 1756年 教授資格取得『物理的単子論』（I）〔1757年バーク『崇高と美の起源』、1758年スエーデンボリ『天界と地獄』、1759年スミス『道徳感情論』、1760年バウムガルテン『実践哲学綱要』、1762年ルソー『エミール』『社会契約論』〕
- 1763年 『神の存在論証の唯一可能な証明根拠』（II）『負量の概念』（II）
- 1764年 『自然的神学と道徳の原則の判明性に関する研究』（II）懸賞論文、『美と崇高の感情に関する観察』（II）
- 1765年 王立図書館副館長に就任『美と崇高の感情に関する観察のための覚書』（XX）
- 1766年 『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』（II）
- 1770年 ケーニヒスベルク大学、論理学、形而上学の正教授に就任『可感界と可想界の形式と原理』（II）正教授就任論文（批判哲学の先駆）〔1776年スミス『国富論』〕

〔批判期〕

- 1781年 『純粹理性批判』（III）（主著）
- 1783年 『学として現れうる限りの将来の形而上学のためのプロレゴメナ』（IV）（主著の要約）
- 1784年 『世界市民的見地における一般史の構想』（VIII）『啓蒙とは何かという問いに対する回答』（VIII）
- 1785年 『道徳形而上学原論』（IV）〔1785年メンデルスゾーン『朝の時間、神の現存在』〕

- 1786年 大学総長就任『人類の歴史の憶測的起源』(Ⅶ)『自然科学の形而上学的原理』(Ⅳ)
 1787年 『純粹理性批判』第二版(Ⅲ)
 1788年 『実践理性批判』(Ⅴ) [1789年フランス革命勃発]
 1790年 『判断力批判』(Ⅴ) [1792年フィヒテ『あらゆる啓示の批判の試論』]
 1793年 『単なる理性の限界内の宗教』(Ⅵ) 検閲不許可、『理論と実践』(Ⅷ)
 1794年 『万物の終焉』(Ⅷ) [1794年フィヒテ『全知識学の基礎』『学者の使命』]
 1795年 『永遠平和論』(Ⅷ) [バーゼル平和条約締結]
 1797年 『道徳形而上学』(Ⅵ)
 1798年 『実用的見地における人間学』(講義録)(Ⅶ)『学部争い』(Ⅶ)
 1800年 『論理学』(Ⅸ イェッシュ編集講義録)
 1802年 『自然地理学』(Ⅸリンク編集講義録)
 1803年 『教育学』(Ⅸリンク編集講義録)
 1804年 2月12日、老衰により死去 [1804年ボロウスキー・ヤハマン・ヴァジアンスキー
 『イマヌエル・カントについて』]

Ⅲ カント批判哲学の構成

哲学の中心問題をソクラテス (Sōkratēs 469-399BC) 以来の問題、つまりデルフィのアポロン神殿の銘「汝自身を知れ (gnōthi seauton)」⁴⁾ に置くなら、人間学 (Anthropologie) は、哲学の単なる一部門ではなく、むしろ哲学の基礎学と考えられる。従ってあらゆる哲学は、人間学を含むといえる。近世哲学について見ると、例えば、ホッブズは、1650年著作『人間論』⁵⁾ では、人間の自己保存の発現により、自然権を行使し、行動の自由を享受するという形をとる。デカルトは、1637年著作『方法序説』⁶⁾ で、人間論は、もっぱら人体について機械論的説明に終始するが、道徳を含む人間性と関係づける。ヒューム (D. Hume) は、1739年著作の『人間本性論』⁷⁾ において、人間本性は、理性でなく「感情」によるものであり、道徳感情は、第三者との共感によるとする。カントは、このような近世哲学者たちの人間学の伝統を意志しつつ、人間学を方法的に性格づける

カントの人間学を取り上げる際、触れられなければならない人間学に関する4つの問いが、カントの1800年著作『論理学』(Ⅸ)の序論にある。それは、

「世界市民的な意味における哲学の領域は、次のような問いに総括しうる。

- | | |
|-------------|-------------|
| 1 私は何を知りうるか | 2 私は何を為すべきか |
| 3 私は何を望みうるか | 4 人間とは何であるか |

第1の問いには形而上学 (Metaphysik) が、第2のものには道徳が、第3のものには宗教

(Religion) が、第4のものには人間学が、それぞれ答える。根底においてこれらすべては、人間学に数えられることができるだろう。なぜなら初めの3つの問いは、最後の問いに関連をもつからである」(IX 25)。

さて第4の問い「人間とは何であるか」について、カントが人間に関心を示し、論述した最初の著作は、前批判期の1765年『美と崇高の感情に関する観察のための覚書』(XX)である。カントは、この著作以来の材料の蓄積によって、晩年に「すでに20年以上毎年講義を続けて来た」(XI429)講義録をまとめた著作に1798年『実用的見地における人間学』(以下『人間学』と略す)(VII)がある。1772-73年から始められたこの講義「人間学」は、前批判期からの継続を示すように「実用的見地における」(VII 119)という但し書きがついている。従ってこの著作『人間学』は、経験的で応用的な「実用的人間学」(VII 136)である。これに対し1781年、批判期以降の人間学は、批判的人間学「超越論的人間学」(XV395)として構想されるものと考えられるのではないか？ そうだとすればカントの問う「人間とは何であるか」の本来の答えは、広くは「実用的人間学」であると共に、つねに同時に哲学的人間学「超越論的人間学」を意味するものとなるだろう。

そこで『論理学』では、先の4つの問いのうち初めの3つは最後の「人間とは何であるか」の問いに関連をもつとあるので、まず第1の問いから解明して行こう。

IV 私は何を知りうるか

前批判期におけるカント哲学⁸⁾は、カント以前のあらゆる哲学思想、特に経験論、合理論、啓蒙哲学を継承し、批判し、統合したものと見てよいであろう。つまりカントは、ニュートン(I. Newton)から自然の法則性を学び、デカルトの合理的理性論を批判し、ヒュームによって「独断のまどろみ」(IV 260)を覚まされた。そしてルソー(J.-J. Rousseau)によって人間性(Menschheit)の尊敬を教えられたのである。特にカントは、ルソーの1762年著作『エミール』⁹⁾を読む以前は、学問を貴ぶの余り、無学な賤民を軽んじていたが「私は人間を尊敬すること」(XX44)をルソーに学んだと1764-65年著作『美と崇高の感情に関する覚書』(II)¹⁰⁾で告白している。この場合のカントの人間学は、批判期のカント啓蒙思想につながるものと理解しうるのである。ここでカントの考える1784年論文『啓蒙とは何か』(VIII)で「啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜け出て」(VIII 35)各自が認識、思考能力をきたえ、他人によることなく、自分ですべて判断し、行動するようになる(VIII 35)ということである。だが人間の認識、思考能力が信用できなければ、啓蒙の意味は成立しない。つまりヒュームのいう懐疑の主張は、因果性(Kausalität)を否定し、科学ひいては人間の認識を不可能にするものとなる。ゆえにカントとしては、まずヒュームに反駁して、自然科学(Naturwissenschaft)の可能性を確保しなければならないものとなる。

そこでカントは、人間認識の成立のために、1781年著作『純粹理性批判』の構成では、自然

を対象とする人間の理論（思弁）理性の本性と限界についての論述を行う。この理論理性は、経験的認識としては、第一の感性（Sinnlichkeit）と第二の悟性（Verstand）という二つの幹から成り立ち、さらに経験的現象（Erscheinung）を超えて、第三の理念（Idee）や理性（Vernunft）概念を投企することができるのである。

そこでカントは、第一の感性の権能を確定する「超越論的¹¹⁾感性論」（A19ff, B33ff）を展開する。まずカントによれば、ヒューム以前では、原因結果の関係を見出すことによって、われわれは複雑な自然現象を秩序あるものと考えていた。ところがヒュームによれば、すべての自然現象において因果性や同一性（Identität）といった原理は見出せない、¹²⁾とする。そこでカントは、この因果性や同一性といった原理を経験に先立つ原理と考え、つまり経験に先立つア・プリオリ（a priori）な原理と考え、逆にそれを経験対象に当てはめ、時間と空間を用いて直感することにより、対象認識が可能になると考えたのである。つまり観察内容を「ア・プリオリな認識の可能性、原理、範囲」（B6）によって秩序づけることにより、自然や経験的世界の正しい認識が成立するとしたのである。このような考え方は、従来のように対象に認識が従うと考えた立場を逆転させた発想であり、この「ア・プリオリな認識の原理」（A22, B36）に、対象が従うという洞察を、カントは「コペルニクス（Copernicus）」（BXVI）的転回としたのである。

次に第二の悟性〔分別〕を論述する「超越論的分析論」（A64ff, B89ff）では、感性に基づく認識の素材に総合的統一を与えるものとして「純粹悟性概念（reiner Verstandesbegriff）」を（A76, B102）を考える。この悟性についてカントは、四大別「カテゴリーである、量、質、関係、様態」（A80, B106）を挙げている。この経験対象の総合的統一を可能にする悟性は、自然に対して法則を指令し、自然法則の立法者（Gesetzgeber）となるのである。

そして第三の理念について、現象界を超えた世界を扱う「超越論的弁証論」（A293ff, B349ff）では、人間の知り得ない「物自体（Ding an sich）」（A327）の世界があるとし、理性の独断論に対して人間の知識や認識の限界を明示する。例えば、人間には、宇宙の無限や魂（Seele）の不滅、神の存在（Dasein Gottes）、人間の自由（Freiheit）とは何かを求める傾向があるが、それらの本質は、知りえない現象の外部、つまり物自体の世界の事柄である、とカントは考える。カントによれば、このような伝統的形而上学の主題としての理念（魂、神、自由）は、思考はされるが、認識できない、とする。このようにしてカントは、知りえない形而上学の世界を知識の領域から排除するのである。

このようにしてカントは「私は何を知りうるか」において、懐疑論に対しては、自然科学の客観性を擁護し、独断論に対しては、人間の知識や認識の限界を明示する。つまりカントは、人間の認識の及ぶ範囲を明確化することによって、認識の不信や懐疑、そして理性の過信が予防できるとする。この批判哲学により、カントは、理性の正しい使用法を明示し、それによって「私は何を為すべきか」という人間の意志の自由を次に確保しようとするのである。

V 私は何を為すべきか

「何を為すべきか」を問う 1788 年著作『実践理性批判』(V)においてカントは、アリストテレス (Alistotelēs 384-322BC) 以降、近代哲学に至るまでの人間の道徳観である「幸福」とは異なる考え方を提唱する。例えば、アリストテレスは、神の生活が理想であり、人間は幸福を追求すべきである、と考える。そのアリストテレスの幸福追求の生活形態には『ニコマコス倫理学』¹³⁾に見られるように三通りある。その第一は欲望、満足および快樂を追求する「享樂的生活」、第二は名誉と正義を追求する「政治的生活」、第三は他にわずらわされることなく自足し、真理を探究する「観想的生活」である。

一方、カントも「幸福 (Glückseligkeit)」(V36) を理性的存在者 (vernunftiges Wesen) [神により定められし者、人間] の生存全体に持続的に伴う快の意識と規定する。それゆえ「幸福」が、人間の意志を規定しうる根拠の一つであることには違いないとする。しかしカントは、自己の幸福を規定根拠とする「随意的他律 (Heteronomie der Willkür)」(V33) は、道徳的な行為を生じさせる「実践的原則 (praktischer Grundsatz)」(V19) であって「道徳的法則 (Gesetz)」(V31) ではありえない。つまり快や幸福による意識規定を含む格律 (Maxime) は、あらゆる理性的存在者に普遍的に妥当する客観的な法則としての資格を有していないとする。そこでカントは「客観的法則」(V32) としての資格をえるために「純粹実践理性の根本法則」(V30) が求められるとする。その根本法則は「汝の意志の格律〔行動方針〕が、常に同時に普遍的な立法の原理として妥当しうるように行為せよ」(V30) というものである。

この客観的法則を論証するためにカントは『実践理性批判』において「思弁理性に対する純粹実践理性の優位」(V119) あるいは「純粹実践理性の要請」(V122) を展開するものとなる。カントによれば、人間はその経験的生活によれば「自然法則」(V69) に従うため、魂、世界、自由については不自由であるが、叡知的 (intelligent) 性格によれば、経験的な条件を超越するので、自然法則に拘束されず、人間は自由となる。すなわち思弁理性でなく、実践理性の世界では、人間は自由であり「意志の自律 (Autonomie des Willens)」(V33) を有するものとなる。この自由は、自然の因果性に対して、自由の因果性といわれ、客観的法則としての資格を有するものとなり、その資格によって、道徳的法則が求められる。その道徳的法則は、定言的命法となり「純粹実践理性の根本法則」となる。その定言的命法に従うことは「義務が自らに独自の法則をもち」(V89) いわば「義務の概念のうちに、実践的強制が含まれ」(V80)、その義務のために魂の不滅、神の存在が要請されるものとなるのである。

以上を前提として、第3の問い「私は何を為すべきか」を見てみよう。カントは、人間の理性を『純粹理性批判』で見えて来たように、人間の理論的認識の面では、感性与悟性の協力の限界内でしか構成的に働かえないことを論述している。一方「何を為すべきか」の実践的認識の面では、

人間は、経験にとらわれず自由に自発的に行為し、実践することができるとする。カントは、このことを前提として、実践理性の原則を二つに区分する。一つは快や幸福を追求する主観的で個人的な原則であり、これを格律と呼んでいる。今一つは、叡知的性格を有し、超越論的であるので、客観的であって、あらゆる理性的存在者〔理性的被造者〕に普遍的に妥当する道徳的法則である。この道徳的法則は、自然法則と同じように普遍妥当性を有するものであるが、しかしこの道徳的法則に従うのは、主観的な人間の行為でもあるので、時と場合には、主観的な人間の行為は道徳的法則に反して働く格律が存在する。従って現実的問題として、実践理性には、格律と法則との間に、二律背反が生じるものとなる。前者の格律は「仮言的命法 (hypothetischer Imperativ)」であり、練達の指令を含む」(V20) ものである。後者の法則は「定言的命法 (kategorischer Imperativ)」であり、これだけが、実践的法則」(V20) である。そしてカントは、この両者の二律背反を調停しようとする。

まず前者の仮言的命法は、時と場合の条件下での命法であるので、特定の結果に関してのみ人間の意志を規定する。つまり人間のある種の欲求や満足を目的とするので、人間の理性と意志は、快・不快、幸・不幸によって左右されるものとなり「随意の他律」(V33) となる。これが格律の世界である。後者の定言的命法は、何の条件もない命法である。従ってこの命法は、特定の實質の結果を何等考えることなく、全て理性の要求に基づくのみである。つまり人間の理性が、道徳的法則によって人間の意志に命令するものとなり「意志の自律」(V33) となる。これが法則の世界である。カントによれば、人間の行為は、道徳的法則によって「あらゆる義務を神の命令として認識する」(V129) のであり、「最高善 (das höchste Gut)」(V115) を実現すべきことになる。そこに「道徳的法則は、われわれに超感性的 (übersinnlich) なるものの国に対する展望」(V147) を許すのである。これがカントのいう「純粹実践理性の根本法則」の内容である。カントは、この法則を純粹理性のただ一つの事実として、そこに人間の自律と自由を実現するのである。従ってカントにとり「私は何を知りうるか」では、自然法則の立法者を問題とし「私は何を為すべきか」では、道徳的法則の立法者を問題とする。換言すれば、カントが「わが上なる星のきらめく天空とわが内なる道徳的法則」(V161) とするところの「わが上なる」は、自然法則の世界であり「わが内なる」は、自由の世界を示しているのである。

VI 私は何を望みうるか

カントは先の「私は何を為すべきか」において純粹理性が道徳的法則を含むことを明らかにしたが、さらに何を私の目的とするかが明らかにされなければ「私は何を望みうるか」の設問も成立しえないと考えたのである。そのためカントは、理性の拡張として「合目的性 (Zweckmäßigkeit)」という「ア・プリオリな原理」を有する「判断力 (Urteilkraft)」(V198)

を成立させるものとなる。さらにこの判断力は「自然の究極的目的の認識」(V378)に関して、人格としての人間の完成を望み、人類全体が道徳的に完成する理念を求める。そしてこの理念が理性信仰による「理性宗教」(VI 12)を望むものとなり、人間は「倫理的共同体 (ethisches Gemeinwesen)」(VI 94)の一員となるのである。そこでカントが「何を望みうるか」について「合目的性」の判断力を論述した著作が1790年『判断力批判』(V)であり「何を望みうるか」について「理性宗教」を論じた著作が1793年『単なる理性の限界内の宗教』(以下『宗教論』と略す)(VI)である。

さてカントの哲学体系は、『純粋理性批判』では、自然の哲学、つまりア・プリオリで構成的 (konstitutiv) 原理として普遍的な自然法則が明らかにされた。『実践理性批判』では、道徳の哲学、つまりア・プリオリな統制的 (regulativ) 原理として道徳的法則が明らかにされた。『判断力批判』は、この二つの哲学を結びつけるようなア・プリオリな原理として「合目的性」を含む判断力に基づいて、二つの哲学関係を拡張しようとする哲学である。換言すれば、自然の領域では認識能力 (Erkenntnisvermögen) としての悟性のカテゴリーが対応し、道徳や自由の領域には欲求能力 (Begehrungsvermögen) としての純粋実践理性が対応し、その中間の領域には合目的性を求める快・不快 (Lust und Unlust) の感情としての判断力が対応するというものである。

このような悟性と理性の中間に位置する判断力は、二つに区分される。一つは「普遍的なもの (規則、原理、法則) が与えられていて、特殊なものをそのもとに包摂する判断力は規定的である」(V179)とされ、従ってこの判断力には、独自の法則を考える必要はない。逆に「特殊なものが与えられていて、それに普遍的なものを求める判断力は反省的 (reflektierend) である」(V179)とされる。そして特殊から普遍へと遡るには、ア・プリオリな原理がなければならない。それが自然の「合目的性」である。この合目的性もさらに二つに区分される。まず「形式的で主観的な合目的性」(V228)は、趣味 (Geschmack) により、また快・不快の感情により、対象の美しさや崇高に関する美学的判断である。そしてその能力としての反省的判断力が「美学的 (ästhetisch) 判断力」(V193)である。今一つの「実質的で客観的な合目的性」(V193)は、自然目的という理性の概念に基づいて有機的存在者としての生物の能力を論理的に判定させる反省的判断力であり、それが「目的論的 (teleologisch) 判断力」(V193)である。

かくして『判断力批判』は第一部「美学的判断力批判」(V201ff)と第二部「目的論的判断力批判」(V357ff)に分かれる。第一部では、芸術の領域に対する考察がなされ、美しいもの (Schöne) の判定としての趣味判断の解明がなされる。第二部では、自然を目的論的に理解し、そこでの合目的性が目指すものは、自然の統一体系に対してもつ適合性である。この自然への適合性から、人は有機体の生命を介して自然の最終目的、世界の存在の究極目的としての道徳性へと上昇する。この上昇運動は、さらに神の道徳的存在証明へと上りつめ、自然と自由との「超感性的基体」(V449Anm)が、われわれの内でも外でも、一つの道徳的創造者 (Urheber) であると規定

されるのである。さらに『判断力批判』で示されたように、人間は世界の存在の究極目的として道徳的存在者 (V445)、つまり道徳的創造者 (V456) を理論的な知でなく、実践的な「理性信仰 (Vernunftglaube)」によってはじめて確信できるものである。そこで道徳も宗教も共に人間の最高善の生き方を指示するものとなる。これがカントの『宗教論』である。

カントは『宗教論』序文において、真正な宗教とは「純粹実践理性」(VI 3) による「理性信仰」に基づいた理性宗教であり、神に奉仕して、道徳的に生きることにあるとする。カントは、この「理性宗教」を、特殊で相対的、経験的な「歴史的宗教 (historischer Glaube) (VI 102) や「教会宗教」(VI 109) と区別して、真の宗教と見ている。このカントの『宗教論』は『実践理性批判』での「私は何を為すべきか」の立論を変更することなく、善と悪の問題とキリスト教および新約聖書の問題を、人間の道徳性と悪魔の現存在に目を向けつつ論考した4つの応用編であるといえよう。

まず第一編「悪と善の原理あるいは人間本性のうちにある根源悪 (das radikale Böse) (VI 19ff) では、人は等しく自らのうちに備わる善への根源的素質 (die ursprüngliche Anlage) を有している。これに対し、原罪として説明される人間への悪への根本的性癖が、根源悪という形で示される。根源悪とは、道徳的法則と格律との間の道徳的秩序を転倒し、特定条件である自愛の動機を、遵守の条件とする性癖である。しかし人間は、善の原理により悪の原理に対抗し、自己を改善しうるとする。第二編「人間の支配をめぐる善と悪の原理の戦い」(VI 57ff) では、人間は確かに悪の原理に対抗しなければならないが、人間は純粹な理性的存在者ではないので、悪の原理がつきまとうものである。そこでイエスにより「道徳的完全性の理想」(VI 61) が「善の原理、人間性の原理」(VI 82) として捉えられることにより、悪がつきまとう人間にも「善の根源的素質の回復」(VI 44) が可能であることを示すのである。

そして第三編「善の勝利による地上での神の国 (Reich Gottes) の建設」(VI 93ff) では、人間が「望みうること」は、全人類が徳の法則の下にある「倫理的共同体」(VI 94) において道徳的に完成することである。その「倫理的共同体」では、人間は倫理的な自然状態を脱することが可能となり、善の原理による悪の原理に対する勝利がなされ「神の民でしかも徳の法則に従う民」(VI 99) と考えられる。第四編「善の原理での神への真と偽りの奉仕」(VI 51ff) とが峻別されるところで、公の宗教では、人間により神への奉仕や礼拝が行われる以上、様々な「偽りの奉仕」が行われる可能性があることに対し、さらに偽りの奉仕を助長する僧職制に対しても批判するのである。

このようにカントの『宗教論』は、悟性、理性、合目的性により、真善美を究明する認識論、道徳哲学、美学 (Ästhetik) からなる批判哲学の思索のなかに不可避的に含まれている。なぜならカントにとり真善美に関わる人間の理性能力を限界づけることは、人間が神へ関わる仕方、人間学的な観点から批判的に限界づけることを意味するからである。この人間と神との関係は、同時に「超越論的人間学 (antropologia-transscendentalis) (XV395) の問題でもある。

Ⅶ 人間とは何であるか

カントによれば「人間とは何であるか」の問いに答える「人間学」は、既述のように20年以上に渡る講義録「人間学」の著作、つまり1798年『実用的見地における人間学』（Ⅶ）である。この『人間学』は、三批判哲学が論じている認識、欲求、判断の三つの能力を取り扱ってはいるが、三批判哲学とは異なって、悟性、理性、合目的性といったア・プリオリで客観的な原理によってではなく「心（Gemüt）」（Ⅶ 161）という一つの主観的な原理に関連させ二部にわたって論述されている。

まず第一部「人間学的訓練学」（Ⅶ 125ff）では、人々が、人間の諸能力を身近に実感できる経験に引きつけ、そこに諸能力が、どのような形で現象しているかを説明する。そこでは悟性や構想力（Einbildungskraft）、快・不快の感情、欲求能力が、個々の資質や主観の状態の中で、どのように健全・不健全に、そして病的な倒錯の形態において活動するのかが、分類、観察されている。カントは、ここでは「心」の性質を認識すること、「心」を健全に保つ可能性を探ること、という視点から人間を見ているのである。第二部「人間学的性格学」（Ⅶ 283ff）では、個人、男女、民族、人種の性格を論じ、人間の中の悪への性癖や善性を、実社会での様々な敵対的、親和的諸関係においてとらえようとする。そこでは実社会の中で、人間が「自己を開化し、市民化し、道徳化する」（Ⅶ 324）ことによって「自己を人間性に値するようにする」（Ⅶ 325）ことの可能性が問われている。

以上のような『実用的人間学』については、一方でバウムガルテン（A. G. Baumgarten）の1739年著作『形而上学』^{14）}の中の「経験的心理学」の巻を参照して論述されたものであり、カントの経験的人間学を表すものである。その実用的人間学は「学校を卒業した後に習得しなければならない」（Ⅶ 120）、「世間知を目的とした人間学」（Ⅶ 122Anm）である。従ってこの人間学は、カント哲学の基本的な方法に連なる批判的で、世界市民的な人間学ではない。しかしこのカントの実用的人間学の叙述の中に他方で「超越論的人間学」の指摘が含まれているのである。

この超越論的人間学の特徴は、カントの『人間学』の叙述の中に、1世界市民としての人間形成、2道徳へ向かう開化的存在である人間の進み方の規定、3人間の中の悪と善の弁証法関係、の諸点が指摘されている。しかしカントによる「超越論的人間学」の著作は存在しない。もし別途にカントの超越論的人間学が想定されるとすれば「私は何を為すべきか」で見られた道徳哲学での「人間」についての論述が、まさにそれに該当するものとなろう。つまり道徳哲学で見られた道徳的法則は「純粋な理性信仰」（V126）により宗教へと至り、超越論的人間学に至るものとなるのである。

従ってカントの人間学には、狭義の実用的人間学と広義の超越論的人間学が考えられるものとなる。狭義の実用的人間学は『純粋理性批判』（Ⅲ）の「超越論的方法論」での「学校概念」に

従う哲学であるとするれば、広義の超越論的人間学は「世界概念 (Weltbegriff)」に従う哲学に該当するといえよう。カントによれば「学校概念」に従う哲学とは「学問としてのみ探求され、この知の体系的統一、従って認識の論理的完全性より以上の何ものをも、目的として持たない認識の体系」(A838)に過ぎない。一方「世界概念」に従う「哲学とは、あらゆる認識が、人間理性の本質的目的〔特に道徳的目的〕に対してもつ関係についての学問」(A839)であり、この限りで「哲学者は、理性の技術者でなく、人間理性の立法者」(A839)となるのである。

では狭義の実用的人間学と広義の超越論的人間学の関係は、どのように考えられるべきであろうか。カントは「人間学遺稿」(XV)で、広狭両義の人間学の関係について、次のように構想する。つまり狭義の実用的人間学から「自分の力を過信しているような学者に対して、人間性を与えるところの何ものかが必要であろう」(XV394)。その何ものかとは、広義の超越論的人間学ということである。カントによれば、狭義の「そのような学者を一つ眼の巨人と呼ぶ。かれは学問のエゴイスト (Egoisten) であり、そのような人には、もう一つの眼、かれの対象を他者の立場から眺めるような、もう一つの眼が必要である」(XV395)。そして「第二の眼は、人間理性の自己認識の眼にほかならない。これがなければわれわれは、われわれの認識の大きさをはかる目安をもたない」(XV395)のである。つまり学問のエゴイストは「一つ眼の巨人たる所以なのである」(XV395)。そこで二つ眼の巨人である「悟性と理性の自己認識が必要とされる超越論的人間学」(XV295)が要請される。換言すれば、一つ眼の巨人である狭義の実用的人間学と二つ眼の広義の超越論的人間学が合して、一つの視野を形作り、いわばそこに正確な遠近法 (die PARSPEKTIVE) を定める人間学が成立する、と考えられる。この双方の人間学の関係は、体系的でなく、正しく「超越論的」な、二つの眼の関係であるといえよう。従ってカントのいう本来的な人間学は、二つの眼をもったより広い意味での人間学¹⁵⁾であり、そこには社会的平等や歴史的進歩をもたらす啓蒙主義が意味づけされるものとなろう。

(未完)

註 カントの著作からの引用は、アカデミー版カント全集に基づき、巻数をローマ数字、原著ページ数をアラビア数字にて本文中に () で示す。ただし『純粹理性批判』からの引用のみは、慣例に従って初版A、第二版Bのページ数によって示す。

- 1) Cassirer, Ernst: *Die Philosophie der Aufklärung*, Verlag von J.C.B. Mohr, Tübingen 1932. Vorrede XV. カッシーラー・中野好之訳『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店、1962年、序文、ix。
- 2) ライブニッツの代表的著作に次のものが挙げられる。Leibniz, Gottfried Wilhelm von: *Discours de métaphysique*. 1686. ライブニッツ・清水富雄・飯塚勝久訳『形而上学序説』中公クラシックス、W41、中央公論新社、2005年。Leibniz, G.W.: *Neue Abhandlungen über den menschlichen Verstand*, (1703) 1765. übersetzt, eingeleitet und erläutert von Ernst Cassirer, der philosophische Bibliothek Band 69, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1915. und Leibniz, G.W.: *Principes de la philosophie ou*

- Monadologie*,1714.*Monadologie*.in : Philosophische Bibliothek,Bd.253,Felix Meiner Verlag GmbH.1982.
 ライプニッツ・西谷裕作訳「モノドロジー〈哲学の原理〉」『ライプニッツ著作集』9所収、後期哲学、
 工作舎、1989年。
- 3) ヴォルフの代表的著作として次のものが挙げられる。Wolff,Christian : *Philosophia prima sive ontologia*,1729.
- 4) ソクラテスのいう「汝自身を知れ」の銘は、プラトンの次の著作にある。Platōn : *The Dialogues of Plato*, translated by B.Jowett.M.A. 4 vol.,Oxford Uni.Press,4ed.,1964. プラトン・田中美知太郎訳「ピレボス」『プラトン全集』4所収、岩波書店、1975年、280ページ、48C。プラトン・藤沢令夫訳「パイドロス」『プラトン全集』5所収、岩波書店、1974年、138ページ、229E。プラトン・田中美知太郎訳「アルキピアデスI」『プラトン全集』6所収、岩波書店、1975年、82ページ、128A。プラトン・山野耕治訳「カルミデス」『プラトン全集』7所収、岩波書店、1975年、70ページ、165A。プラトン・藤沢令夫訳「プロタゴラス」『プラトン全集』8所収、岩波書店、1975年、187ページ343B。プラトン・森進一・池田美恵・加来彰訳「法律」『プラトン全集』13所収、岩波書店、1976年、678ページ、923A。
- 5) Thomas Hobbes : *The Elements of law,natural and politei* : part I, Human nature,1650.edited with an introduction by J.C.A.Gaskin.Oxford University Press,1999.
- 6) Descartes,René : *Discours de la Méthode*,1637.in : Oeuvres de Descartes, publiées par Charles Adam et Paul Tannery,Correspondance IV, J.Virin Paris 1965.in : Philosophische Bibliothek,Bd.261. Felix Meiner Verlag GmbH.Hamburg 1960. デカルト・野田又男訳『方法序説・情念論』中公文庫、中央公論新社、1974年。
- 7) Hume,Devid : *A treatise of human nature*,being an attempt to introduce the exper imental method of reasoning into moral subjects and dialogues concerning natural religion,1639-40.vol. I, II, Reprint of the new edetion London 1886,scientia verlag aalen 1964. 大槻春彦訳『人生論』一三四、岩波文庫、岩波書店、1948,1949,1951,1952年。
- 8) 前批判期におけるカント哲学の解明には、例えば、次の文献を参照。Cassirer,Ernst : *Kants Leben und Lehre*,Verlag bei Bruno Cassirer,Berlin,1.Aufl.1918,1921. カッシーラー・門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、1986年。浜田義文『若きカントの思想形成』勁草書房、1967年。高橋昭二『カントの弁証論』創文社、1969年。森哲彦「カント哲学前批判期の解明」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第7号、2007年6月。森哲彦「カント哲学前批判期の解明(2)」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第9号、2008年6月。
- 9) Rousseau,Jean-Jacques : *Émile ou de l'éducation*,1762.Emile/by Jean-Jacques Rousseau : translated by Barbara Foxtéy,J.M.Dent & Sons,1950. (Everymann's library ; essays & belles-letters ; no.518) . ルソー・今野一雄訳『エミール』上中下、岩波文庫、1964年。
- 10) 『美と崇高の感情に関する覚書』の解明には、例えば、次の文献を参照。浜田義文『若きカントの思想形成』勁草書房、1967年。森哲彦『カント哲学前批判期の解明(2)』名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第9号、2008年6月、5-10ページ。
- 11) 超越論的(transzendental)とは、対象認識の可能性の条件に関する概念や判断のことで、対象認識にア・プリオリな概念、カントによれば、悟性カテゴリーを使用することを意味する。なお transzendental を、先験的でなく、超越論的と訳したのは九鬼周造とされている。また和辻哲郎によれば、transzendental の訳が、先験的ではア・プリオリと同義になるので「超越論的」と訳する、とする。和辻哲郎「人格と人類性」『和辻哲郎全集』第9巻所収、岩波書店、1963年、339ページ以下。
- 12) Hume,D. : *A treatise of human nature*.p.262.
- 13) Aristotelēs : *Nikomachische Ethik*.übersetzt von Günther Bien,der philosophische Bibliothek Band

5, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1980, S.5. アリストテレス・加藤信朗訳「ニコマコス倫理学」『アリストテレス全集』13所収、岩波書店、1973年、9ページ、1095b。アリストテレス・高田三郎訳『ニコマコス倫理学』上下、岩波文庫、岩波書店、1971, 1973年、22ページ、1095b。

14) Baumgarten, Alexander Gottlieb : *Metaphysica*, 1739.

15) カント以降の哲学的人間学研究では、カントの超越論的人間学の進展はなく、むしろ応用的、実用的人間学が支持されてきている。それについて例えば、20世紀での哲学的人間学研究では、次の著作が挙げられる。現象学的方法によるものシェラー (Max Scheler 1874-1928) 『宇宙における人間の地位』1928年 (大島豊訳、第一書房、1937年)。動物学的、現象学的方法によるものプレスナー (Helmut Plessner 1892-1985) 『有機体の諸段階と人間-哲学的人間学入門』1928年。生物学的、現象学的方法によるものゲーレン (Arnold Gehlen 1904-1976) 『人間』1940年。

参考文献

有福考岳・坂部恵編『カント事典』弘文社、1997年。

Cassirer, Ernst : *Kants Leben und Lehre*, verlegt bei Bruno Cassirer, Berlin 1918. 2. Aufl. 1921. 門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、(1986年) 2003年。

Cassirer, E. : *Die Philosophie der Aufklärung*, Verlag von J.C.B. Mohr, Tübingen 1932. カッシーラー・中野好之訳『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店、1962年。

福谷茂「カント」加藤尚武責任編集『哲学の歴史7、理性の劇場、18-19世紀カントとドイツ観念論』所収、中央公論新社、2007年。

加藤泰史「カント」金子晴勇編『人間学-その歴史と射程』所収、創文社、1995年。

牧野英二『カントを読む』岩波書店、2003年。

坂部恵・佐藤康邦編『カント哲学のアクチュアリティ』ナカニシヤ出版、2008年。

坂部恵『理性の不安』勁草書房、1976年。

Schultz, Uwe : *Immanuel Kant in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, in : Rowolts Monographien ; 101, Hrsg. von Kurt Kussenberg, Rowolts Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg 1965. シュルツ・坂部恵訳『カント』ロロロ伝記叢書、理想社、1982年。

高橋克也「人間学遺稿」カント・渋谷治美・高橋克也訳『カント全集』7所収、岩波書店、2003年。

宇都宮芳明・熊野純彦・新田孝彦編『カント哲学のコンテクスト』北海道大学図書刊行会、1997年。

山下太郎「解説『人間学』について」『カント全集』第十四巻所収、理想社、1966年。

森哲彦「カント純粹理性批判の解明」名古屋市立大学人文社会学部『研究紀要』第17号、2004年11月。

森哲彦「カント実践理性批判の解明」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第5号、2006年6月。

(筆者は、名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授)